季刊
vol. 217
NAGOYA CITY MUSEUM NEWSLETTER

名古屋市博物館だより

編集・発行／名古屋市博物館　〒467-0806　名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1
TEL(052)853-2655　FAX(052)853-3636　http://www.museum.city.nagoya.jp
平成28(2016)年4月1日発行　(年4回1・4・7・10月)
3,800部発行　無料
古紙パルプ配合再生紙使用

今や海外旅行で人気の、世界遺産アンコール・ワット。9～15世紀にカンボジア内陸部を中心に巨大な勢力を誇った、アンコール王朝の遺跡です。その豪壮華美な石造寺院の大きさと迫力には圧倒され、さらにヒンドゥー教・仏教の神々を造形した石像の精巧さ、美しさに目を奪われます。現代人でさえ驚かせるのですから、アンコール王朝の時代の人々は心から畏敬(いけい)したにちがいありません。

こうした石造寺院とそこを彩る神々の像は、アンコール・ワットだけでなく、アンコール王朝の歴代の王によって次々と造られました。しかし、繁栄を極め、人々を驚かせた建造物と彫刻も、圧倒的な自然の力には抗(あらが)えませんでした。アンコールの都と寺院群は、王朝滅亡後は深い熱帯雨林のなかに埋もれていき、19世紀に欧米諸国に広く知られるまでは、比較的ひっそりと信仰の営みを続けていました。

本展では、6～8世紀の小国乱立の時代からアンコール王朝の繁栄に至るまでの、華やかな神々の世界の展開を彫刻美術でご覧ください。

また、同時代のインドシナ半島に栄えたミャンマーやタイの彫刻美術も展示するほか、各時代に関連する代表的な遺跡の紹介や、カンボジアの伝統的な民族文化を知るイベントも用意しています。今年の春は、インドシナ半島の豊かな歴史と文化にどっぷりと浸っていただけます。ぜひお越しください！

(藤井康隆)

歴史博物館の学芸員とは？
「刈谷市歴史博物館」の開館に向けて

「学芸員の仕事の全てを学んできなさい」

昨年４月、刈谷市の上司からこう言われ、名古屋へ送り出されました。現在刈谷市では歴史博物館の建設を進めており、県内最大の博物館である名古屋市博物館で１年間研修させていただきました。

博物館学芸員の役割とは？

学芸員資格を取得するために一部の大学では「博物館実習」という科目が用意されています。私も学生時代受講しましたが、座学が中心で内容もほんの一部。博物館での勤務経験のない私にとって、この１年は文字どおりの「博物館実習」で、大変多くの知識・経験を得ることができました。

名古屋市博物館では学芸員が「展示」「資料」「普及」の３つの係に分かれて、業務を行っています。１年で「全て」を学ぶため、４ヶ月毎にこの３つの係を渡り歩くこととなりました。

４月に最初に配属されたのは展示係です。この係は展示替えの準備や展示室の管理など、常設展・特別展に関係する仕事が中心です。この中で一番驚いたのは、展示ケースや展示台の多さ。博物館の展示室を見ていただくとわかりますが、資料は展示台の上に載せられ、移動できる展示ケースもいたる所に置かれています。この展示台やケースのバリエーションがものすごく多く、使わないものはバックヤードに格納されています。

その他、夏に開催された名古屋市立大学のサークル「ＭＡＲＯ」とのコラボイベント「まろじぇくと」のお手伝いもさせていただきました。大学生の発想は豊かで、行動力もあります。「博物館に若い人が来ない」という課題はどの館でもありますが、学生の力を借りることも重要だと思いました。

８月からは資料係となり、収蔵庫の管理や寄贈資料のデータ作成などに携わりました。資料の保存は博物館業務の基本ですが、光の当たりにくい仕事です。さらに資料の写真を撮影し、蓄積する重要な業務もあります。これも資料の形態や状況に応じて様々な方法があり、「見えたままを撮す」という資料写真の難しさを学ぶことができました。

12月からは普及係に移りました。名古屋市博物館では学校連携が教育普及活動の柱になっています。特に「その道の達人派遣事業」は学芸員が小学校に実物資料を持ち込み、実際に触れてもらうことで児童の視野を広げてもらうという目的で行っているものです。こうした事業は学校単独では難しく、博物館の大切な役割の一つであると感じました。

実物資料のもつ力

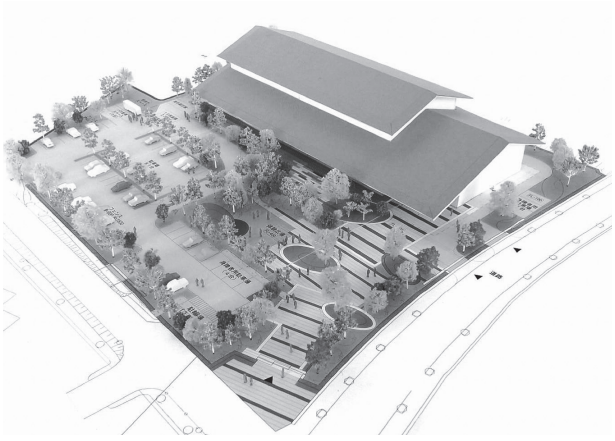
名古屋市博物館は様々な事業を行っており、「博物館とは何のためにあるのか」についても考えさせられました。その答えは一つではありませんが、最も重要なのは「実物資料のもつ力」を伝えることであると考えています。それは10月に開催された企画展「横井庄一さんのくらしの道具」で、展示補佐として作業に携わったことがきっかけです。

私にとって横井さんといえば教科書で知った、いわゆる「歴史上の人物」でした。しかし、ご家族にお会いする事で横井さんを身近に感じることができ、さらに生活道具に触れることで横井さんの何もないところから衣食住の道具を生み出していった「凄さ」を知ることができました。この「凄さ」をたくさんの方に伝えたい、という思いになり、展示では横井さんの作業の跡が見えるよう工夫をしました。展覧会には横井さんを直接知らない、若い世代の方にも多くご来館いただき、横井さんの生活道具をじっくりとご覧になっていました。「実物資料のもつ力」を伝えることの重要性を感じました。

「刈谷市歴史博物館へようこそ」

刈谷市歴史博物館は平成30年度中の開館に向けて動いています。名古屋市より規模は小さいことから、地域博物館としての特色を強く出していかなければなりません。この１年間で学んだことを活かし、開館時には「博物館へようこそ」と胸を張って言えるよう今後の準備をすすめていきます。

（長澤慎二）



刈谷市歴史博物館イメージ

文化財を虫から守る 二酸化炭素殺虫処理

あなたの知らない？博物館の裏の顔

博物館といえば、楽しくて面白い展覧会。しかしその裏側では、地道な資料収集・保存活動が行われています。ここでは、そんな博物館の地道な活動の一コマをご紹介します。

文化財は、様々な原因で劣化します。物理的な衝撃はもちろん、温湿度の変化、紫外線、カビや害虫などなど。

このようにデリケートな文化財を守るために、博物館では様々な対策を講じます。例えば、収蔵庫や展示室の温湿度は適切な状態に管理され、空調に問題が発生した際にすぐ対処できるよう、記録も常に取られています。また、展示ケースの照明にはUVカットの文化財用照明器具が使用され、展示資料によっては照度もかなり落とします。展覧会の会場が肌寒かったり薄暗かったりするのは、文化財を守るためなのです。

こうした文化財保存の中で大きな部分を占めるものに、虫やカビなどから文化財を守る虫菌害対策があります。そして、虫菌害対策を進める上で重要な考え方が、IPMと言われるものです。

ＩＰＭとは…？

IPMは、Integrated Pest Managementの略で、「総合的有害生物管理」という意味の言葉です。文化財を虫やカビから守るために、様々な手段をうまく組み合わせながら用いていくという考え方です。

この考え方が広まる以前の虫菌害対策は、臭化メチルと酸化エチレンというガスを使って虫やカビを殺す方法（燻蒸（くんじょう）といいます）に頼っていました。しかし、臭化メチルはオゾン層破壊物質であるため、平成16年に文化財保存の現場では使用できなくなりました。そこで注目されたのが、このIPMという考え方なのです。

IPMは文化財保存のオリジナルではなく、農業分野から導入された考え方です。有名なレイチェル・カーソンの『沈黙の春』では、農薬の使用による環境破壊に警鐘がならされていますが、その後農業分野では、農薬だけに頼らないで有害生物をコントロールする方法が蓄積されてきました。文化財保存におけるIPMも、これに学んだものなのです。

具体的にはどうするの？

文化財IPMでは、殺虫・殺カビ薬剤の使用を抑えるために、予防段階に力が注がれます。つまり、虫やカビの発生・繁殖を防ぐため、日常的な清掃や温湿度管理、害虫侵入経路の遮断を徹底し、監視・記録によって問題の早期発見に努めることで、薬剤の使用を必要最小限に留めるのです。

さらに、燻蒸に用いる薬剤も、近年では人や環境、そして資料自体の安全性が考慮され、二酸化炭素などの非化学的な薬剤に移行しつつあります。酸化エチレンなどの化学薬剤による燻蒸も、信頼の置ける専門業者に委託して実施されるので安全性に問題はありませんが、二酸化炭素や低酸素による処理なら、もし事故が起きても危険性はかなり抑えられます。

名古屋市博物館でも、臭化メチル全廃後、代替薬剤による移行期間を経て、平成23年度から害虫監視用のトラップを設置、26年度に燻蒸庫の改造を実施し、27年度から二酸化炭素による殺虫処理を開始しました。

新収資料など、虫が付いている可能性のある資料を燻蒸庫に搬入し、密封した後、二酸化炭素を徐々に投入していきます。既定の濃度に達したら、虫が死ぬまで２週間待ちます。気温が低いと効果が弱まるので、冬になる前に実施する必要があります。

２週間後、風通しがよく人通りのないところ（つまり屋上）に二酸化炭素を排気し、庫内の二酸化炭素濃度が平常値にまで下がったら、処理完了です。

実は、二酸化炭素には殺カビ効果はありません。この点では、化学薬剤のほうが信頼できます。しかし、IPMの全体を充実させることで、このようにより安全な方法に移行が可能となります。

博物館の裏側では、より良い文化財保存の実現に向けた取り組みが行われているのです。（鈴木　雅）

殺虫処理の効果を測定するために、コクゾウムシのサンプルを燻蒸庫の中と外に１つずつ設置します。効果があったのはどちらでしょう？

សូមស្វាគមន៍ ប្រាសាទអង្គរវត្ត

特別展

アンコール・ワット への みち

THE PATH TO ANGKOR WAT

インドシナに咲く神々の楽園

2016年
4月16日(土)－6月19日(日)

開館時間｜9:30～17:00（入場は16:30まで）
休館日｜月曜日・第4火曜日（5月2日(月)は特別開館）　4/18(月)、25(月)、26(火)、5/9(月)、16(月)、23(月)、24(火)、30(月)、6/6(月)、13(月)
主催｜名古屋市博物館、中日新聞社、日本経済新聞社、テレビ愛知　後援｜在名古屋カンボジア王国名誉領事館　協力｜エイチ・アイ・エス

アンコール王朝の文化はインド文化の影響を受けて形成されました。アンコール王朝以前からある在地の文化・技術・生業に、インドから伝わったヒンドゥー教と仏教の世界観や文化を取り入れ、それらを利用して自らの王権や思想、芸術を表現することで、豊かな独自の文化を育んだのです。

その文化の最高潮を表すのが、まさしく世界遺産アンコール・ワットをはじめとするアンコール遺跡群です。そこに表現された神々の像はいずれも温かく優しげな微笑みを浮かべており、アンコールは神々が舞う楽園として繁栄を極めたことをうかがわせます。その神々を造形した彫刻美術を通して、インドシナ半島の豊かな歴史世界をご堪能ください。

シヴァ
コー・ケー様式／10世紀前半

ブラフマー
プレ・ループ様式／10世紀後半

ヴィシュヌ
アンコール・ワット様式／12世紀

ブラフマー・ヴィシュヌ・シヴァはヒンドゥー教の最高神です。ブラフマーは世界の創造神、ヴィシュヌはその世界の調和と維持を司る神、シヴァは終末をむかえた世界を破壊し次の創造に備える破壊神として、信仰されてきました。

アンコール王朝の歴代の王が建造した都は、いずれも中央に大規模な寺院を配置していました。神々の像は、本来はその寺院の各所に配置されていたものです。

地上から上へ段々に築かれた壮観で威厳に満ちた寺院、その各階の随所にさまざまな容姿と性質・能力をもつ神の像がいるようすは、まさしくこの世に現れた神々の世界だったことでしょう。

本展覧会では、神像の造形美や表情を鑑賞するとともに、それらの像で満ちた神々しい空間と、そこで人々が何を思ったかに、思いを馳せてみてください。

ヤクシー
バケーン様式／10世紀初期

ヤクシャ
バケーン様式／10世紀初期

ヤクシャは仏教では「夜叉（やしゃ）」として知られる鬼神です。ヤクシャは男神で、女神はヤクシーと呼びます。鬼神ですが、一方で人間に恩恵をもたらす守護神でもあります。

パールヴァティー
サンボール・プレイ・クック様式
7世紀前半

ガネーシャ
プレ・ループ様式
バンテアイ・スレイ様式／10世紀後半

パールヴァティーはシヴァの妻で、美しく心優しい女神とされます。ガネーシャはシヴァとパールヴァティーの息子で、学問と財産の神として信仰されています。

ラクシュミー
コー・ケー様式／10世紀前半

ラクシュミーはヴィシュヌの妻で、幸運と美と豊穣（ほうじょう）の女神とされています。ヒンドゥー教の神ですが、仏教にも取り入れられ「吉祥天」と呼ばれています。

ナーガの上のブッダ
バプーオン様式／11世紀

七つの頭をもつ蛇王ナーガが、瞑想（めいそう）するブッダを降り続く雨から守ったという伝説の一場面を表現しています。

ロケーシュヴァラ
バイヨン様式／12世紀末〜13世紀初頭

仏教の観音菩薩です。バイヨン寺院を建造したアンコール王朝のジャヤヴァルマン７世王は仏教を篤く信仰し、王を観音菩薩の化身としたため、観音菩薩を数多く造形しました。

《アンコール・ワットへのみち　インドシナに咲く神々の楽園》公式ウェブサイト　http://www.path-to-angkorwat.com/

名古屋と東別院

名古屋の中心部に広大な境内がひろがる東別院（真宗大谷派名古屋別院）は京都の東本願寺（真宗本廟）の別院として元禄３年（1690）に創建されました。

御坊さん

「別院」というのは明治９年(1876)以降の名称で、それ以前は名古屋の人々から「東掛所（ひがしかけしょ）」「御坊（ごぼ）さん」などと呼ばれました。「掛所」「御坊」は時代や地域によって定義が多少ちがいますが、地域の真宗寺院の中核となる本山直轄の寺院のことです。東本願寺は慶長７年（1602）に西本願寺から分立したのち、各地に御坊を設置してきましたが、名古屋への御坊設置は遅れていました。濃尾地方において多くの末寺や門徒を束ねる既存の有力寺院の関係者達が、その地位を奪いかねない御坊設置を望まなかったためです。推進派・反対派の駆け引きの末、名古屋城下袋町（中区錦二丁目）にあった泉龍寺を昇格させることで藩の許可を取ったのが前記の元禄３年のことです。町中にあり、わずか敷地75坪の泉龍寺では御坊としては手狭なので、現在の所在地（中区橘）に寺地１万坪が藩から寄進されました。ここは織田信長の父、信秀の居城であった古渡城の跡地にあたります。元禄５年に仮御堂を建てて移転しましたが、資金難もあり本堂が当初計画より縮小されて完成したのは10年以上たった元禄15年のことでした。

建立から約百年を経過した頃には、名古屋の発展に伴い、御坊の本堂も手狭となり、文化２年（1805）から文政６年（1823）にかけて、建て替え工事が執り行われました。これらの事業に藩の援助はなく、門徒の寄附と労働奉仕によってまかなわれました。残念ながら江戸時代の堂宇のほとんどは昭和20年（1945）に空襲で焼失し、現在の本堂は昭和37年に再建されたものです。

にぎわい今昔

御坊が建立された頃、それより北の大須観音や七寺などが建ち並ぶ南寺町は、信仰の町であるとともに芝居小屋や妓楼なども軒を連ねていました。この盛り場は享保16年（1731）７代藩主となった徳川宗春の治世には、御坊周辺まで広がる全国有数の歓楽街と化してゆきます。当館公式サイト内の「コレクション　精細画像で見る」で紹介している「享元絵巻」にはそのにぎわいの様子が生き生きと描かれていますのでご参照ください。

高力猿猴庵の『絵本富加美草』（東洋文庫蔵）によれば、文化文政の本堂建て替え工事では、整地や上棟式などの工程・儀式がすべてイベント仕立てで執り行われ、そのたびごとに大勢の見物客を集めました。城下の各町内が寄附金を納付する際にも花篭や獅子、亀など様々な見立て細工の作り物を台車に飾り付けてパレードに仕立て上げたようです。御坊周辺ではあふれかえる見物客・参詣者・工事関係者を目当てに飲食店や土産物、手荷物預かりなどの屋台が建ち並びました。

東別院

写真は今年１月28日に開催された「東別院てづくり朝市」の様子（毎月28日開催、ただし今年の４月は24日開催）。平日にもかかわらず、手作りの雑貨や自然食品を求めて大勢の人々が集まりました。600mほど離れた西別院（本願寺名古屋別院）では「Oneコイン朝市」、両寺をつなぐ橘町付近では「たちばな大木戸ひなた市」も同日開催されており、江戸時代のにぎわいを彷彿とさせます。「御坊さん」は今日でも門徒の信仰の地であるとともに、町おこしの拠点としても親しまれているのです。

（山田伸彦）

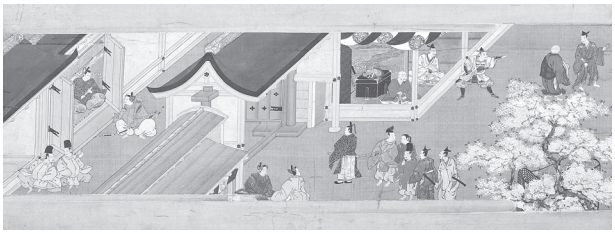
常設展フリールーム

親鸞聖人750回忌　東別院の重宝

平成28年３月23日（水）～５月22日（日）

（常設展観覧料　一般300円、高大生200円、中学生以下無料）

主な出品物と展示期間



親鸞聖人絵伝（上写真・第３幅部分）	３月23日～４月17日
四季山水図屏風（重要文化財）	３月23日～５月８日
松鳩図扇　狩野永徳筆	３月23日～５月８日
源氏物語書画色紙貼交屏風	３月23日～５月22日

デジタル写真に思うこと

昭和から平成となって27年。昨今、時代を懐かしんでか、戦後の昭和をテーマにした展示の開催や、特に地域ごとの昭和の出来事を集めた写真集の出版が目立つようだ。なかには個人アルバムの延長かと思われるような写真集も出始めている。開いてみれば、何気なく写された町並み、家族の記念写真、テーマを持たない街頭スナップなど、ごく普通の写真が淡々と並んでいる。成る程、どのような写真でも時を経れば、懐かしさばかりではなく、その時々の今を感知しうるものとして立派な時代の記録として見えてくる。数十年前に撮られた写真も時代と見方が変われば伝わるものが違ってくる。見方、見え方の自由な広がりを持つ写真の特性を十分に活かす事ができているわけだ。

7年程前になるが、関東地方のある地方都市で「郷土の風景や文化財を記録する」というテーマで講座を持ったことがある。教材用にと名古屋地方の年中行事の写真をキャプションを付けずに掲示していたところ、ご高齢の参加者のお一人が、ある写真の前で立ち止まった。どうやら見知った光景を見つけられたようだった。笠寺観音の節分会の人出だった。まさかと思いお尋ねすると、青春時代に笠寺付近で過ごされた様々な思い出を語ってくださった。20年前に撮影した写真から、その方の60年前の思い出を引き出すことになった。昭和の終わる頃からしばらくの間、笠寺観音の節分会の様子を撮影していたことがある。小さな出来事ではあったが、改めて写真を記録として残すことの大切さを知ることができた。

平成28年、写真を取り巻く環境はフィルム、印画紙を使った銀塩写真のわずかな一片を残すも、いまや、デジタル全盛と言ってもよいのだろう。今更ではないが、スマホで撮られた写真の何と美しいことか。観光地、イベント会場、町中いたるところでスマホを構えている人たちを見かける。デジタルが映像を身近のものとし、あまりにも手軽にそして簡易に映像を得られることで、日頃カメラを持たない人たちにも撮影が常態化してきている。驚くことに、私的な日常をウェブ上に公開することにためらいを持たない人たちも現れている。

さて、当館でも長年続けてきた銀塩写真での撮影からデジタルへの切り替えが進んで3年程になる。写真術発明から、約180年、史実によれば写真の文化財への利用も同時期からになるので、銀塩写真の進歩と文化財写真の歩みはある時期まで歩調をそろえてきたことになる。広告や報道など、他ジャンルでは、すでにデジタルへのメディア変換を終えていた。文化財写真がそれを遅らせた理由の一つは銀塩写真（ここでは白黒写真）が、百数十年前の草創期の写真の存在が各地で確認されているように、非常に優れた保存性能を有していたことである。もう一つはデジタルの特性である劣化しないとされる複製の容易さと、関連ソフトの豊富さが、使い方によって、本来撮られたままであった写真のオリジナルの行方を見失わせることへの恐れである。文化財写真においては、あるがままの手付かずの画像を残す、この事こそが重要で各自の自覚に負うところだったはずだ。

昭和49年　岐阜市内

しかし、科学の進歩は足踏みすることなく、瞬く間に銀塩写真はデジタルに凌駕され、文化財分野でもメディア変換を終えるまでにいたっている。もちろん、改変しないという各自の自覚は前提条件として持ち続けねばならないであろう。

先頃、ロイター通信は世界中から持ち込まれる写真についての必要条件を社外カメラマンに通達した。「撮って出し（撮ったままの）でjpg画像であること」。過去に改変された写真を世界中に配信してしまった反省から生れたようだ。優れた活用媒体であるはずのデジタルの怖さが報道現場に警鐘を鳴らすことになった。

デジタル写真が写真であるという世代が中心となる今、過去を知る古い世代は新しいメディアの長所、短所を見極めながら折り合いをつけていくしかない。数十年前の昭和の写真から様々な思いがわき上がったように、次の世代も平成の写真から多くの思いを抱いて欲しい。そのためにも「撮って出し」は必要だ。

（杉浦秀昭）

昭和63年　笠寺観音

資料紹介　中林竹溪筆　琵琶湖真景図

6月29日（水）から7月24日（日）まで、博物館二階常設展示室テーマ10およびフリールームにおいて「生誕200年 中林竹溪」を開催する。

中林竹溪（1816−1867）は幕末の京都で活躍した画家。名古屋生まれの文人画家・中林竹洞（1776−1853）の息子である。今回は展示予定の「琵琶湖真景図」を紹介したい。

中林竹溪とは

頑固者で他人に心は開かない。荒唐無稽な奇行で知られ、酒の失敗も数知れず。『古今中京画談』等が伝えるところによると、中林竹溪は相当接しがたい人物であったらしい。名古屋から上京し成功をおさめた竹洞は、息子にも大きな期待を寄せ、手塩にかけて育てあげた。その甲斐あって、竹溪は画家としての才能を開花させるが、放逸なふるまいには竹洞も手を焼いたようだ。

描かれた場所

ところが、竹溪の描いた作品を見ると、伝えられる人物像とはやや異なる印象を抱くことになる。本作「琵琶湖真景図」もその好例で、琵琶湖の風景を繊細かつ丁寧に描いており、青々とした湖面がとりわけ美しい作品だ。画面左下の山が起点となり対岸にかけて湖面を見渡す、また手前の街並みを見下ろす様を表現している。対岸にそびえる山は、近江富士の異名をもつ三上山。そこから右端へとつづく赤茶けた山々は、伐採のために当時はげ山となっていた田上地区。家屋が軒を連ねる場所は大津の街並み、右端にかすかにのぞく城郭は湖上に築かれた膳所城であろう。本作品のタイトルとなっている真景図とは、必ずしも現実の地勢を正確に写し取るものではなく、山水画の伝統的表現や思想を意識した絵画ジャンルの呼称であるが、おおむね琵琶湖南端部の西から東を望んだ風景が収められていると判断できよう（地図上の▭を参照）。琵琶湖という主題については、近江八景という特定の名所を描いた絵画が当時人気をあつめていた。しかし本作では、八景のような特定の名所に注視する意識は低く、琵琶湖全体の自然な眺望が意図されている。

画家竹溪の「ワザ」

竹溪は、出不精の父と異なり、よく旅をした。各地の風景を目にした経験が本作にも反映されているかも知れない。手前の山肌には、濃い墨を用いて細かなタッチを重ねるのに対し、対岸の山々については薄い墨や藍を平面的に塗布する。自然な奥行きを持った描写を、濃淡や筆づかいを巧みに操作することで実現しており、鑑賞者は琵琶湖を目の当たりにしたような気分になる。画面に対峙すれば、きらきらと湖面にかがやく陽光のまぶしさ、おだやかに湖面を吹き渡る涼風がおのずと体感されるであろう。

（横尾 拓真）